

有年山城



(有年山城主が竹中半兵衛の内応工作に応じる)

「五月廿四日、竹中半兵衛申上ぐるの子細は、備前内
八幡山の城主、御身方仕る由申越し候。御満足なされ、
羽柴筑前秀吉かたへ黄金百枚、并に竹中半兵衛に銀子
百両下され、忝き次第にて罷歸り候なり。」

(『信長公記』天正六・一五七八年五月二十四日条)

(有年山城・駒山城の宇喜多方が織田・羽柴方を撃退)

「一さき勢備前さかいいめハ、去一日敵はたらき候処ニ、
八まん山・こま山両方よりかけあわせ、敵おいくずし、
千計うちとり候とハ申候へ共、三百計川へおい入、首
百計うちとり候」

(天正六・一五七八年六月六日証賢・下間頼廉連署書状

『和歌山県史 中世史料二』所収)

有年山城出土遺物

- 1・2 中国製磁器
- 3 天目茶碗

いずれも城が機能した時代の遺物です。

天目茶碗は喫茶に用いられた可能性があるもので、身分の高い人物の存在をうかがわせます。



アクセス



城の歴史

有年山城は赤穂市東有年・有年檜原にまたがる大鷹山（標高 201m）の山頂に位置し、大鷹城・八幡山城とも呼ばれる赤穂市内最大の中世山城です。

『赤松家播備作城記』や『播磨鑑』によれば、赤松範資の三男、本郷掃部助直頼が暦応年間（1338～1342年）に居城していたとされ、南北朝時代に赤松氏によって築城されたものと考えられます。

1520年ころになると、主君赤松氏と対立した家臣の浦上氏が、備前国や赤穂郡周辺の支配権を赤松氏から奪おうとします。これにより有年山城も赤松氏・浦上氏のせめぎあいに巻き込まれ、最終的には浦上氏の城となっていたようです。

天正3（1575）年には浦上氏も家臣の宇喜多直家によって追放され、赤穂郡の支配権は宇喜多直家へと移ります。これに伴い、有年山城も宇喜多方の城となっています。

天正6（1578）年、織田信長に中国征伐を命じられた羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）が西播磨へ侵攻してくると、宇喜多直家は同盟関係にあった毛利氏と連携し、これと対峙。上月合戦で著名な上月城（佐用郡）周辺と同様に、有年山城や駒山城（上郡町）を中心とする有年・上郡地区も播磨と備前、毛利方と織田方の「境目」となる重要な地域となっていました。

上月合戦終結後、毛利方の吉川元春（毛利元就の次男）は、有年山城北側にある黒澤山光明寺に一時本陣を移し、また羽柴方も竹中半兵衛が有年山城主に対して調略を行うなど、有年山城を中心として、毛利・宇喜多の西国大名と中国平定を狙う織田・羽柴方が一触即発の状態となりました。

しかし天正7（1579）年7月に宇喜多直家が織田方へ帰順。これにより有年山城も戦わずして織田・羽柴方の城となりました。

天正8（1580）年に三木城の別所氏や長水山城の宇野氏等を攻略した羽柴秀吉は、播磨平定を達成。翌年には東播磨を中心に「城わり（破城）」を命じました。おそらくこのころに有年山城も廃城となったと考えられます。



↑黒澤山光明寺奥之院
・後藤陣山城跡へ

畝状空堀群

⑥石積

堀切

登山路

①土橋

→放亀山古墳へ

大手と豎堀

②横堀

③石積

⑤大型土坑

196.3

建物跡?

建物跡?

建物跡?






④山頂

201


150

豎堀

150

 : 堀
 : 建物基壇状の高まり
 : 穴・溝
 : 岩場
 : 石積・石列

0 100m




⑥石積



⑤大型土坑 (穴倉?)



③郭を区画する石積



①城の大手となる土橋



④山頂からの眺め



②横堀

登山路

登山路

↓東有年・片山薬師堂へ

↓有年八幡神社へ

100

100